

第2節 土器棺と土器棺もどき

－原始・古代の土器埋納と土器棺の対比－

(財) 元興寺文化財研究所 角南 聡一郎

I. はじめに

大阪府八尾市小阪合遺跡では、弥生時代終末～古墳時代初頭の埋没住居865を切って壺で壺を蓋した状態で埋置されていた。土器は横位になっており、これと蓋の存在が単なる偶然の所産ではなく意識的に埋置されたことの根拠となろう。

一般的に、このような出土状況を呈する場合で、最も用途としての可能性が高いのは土器を転用した棺、つまり土器棺であろう。しかし、土器棺には遺体が遺存していることはほとんどなく、副葬品を伴う場合も僅少である。このため、これまで土器棺とされてきた資料のうち、その可能性が疑問視される資料がかなりある。そこで、本節では、弥生・古墳時代の土器棺と、その他の遺構を区別するために、土器棺かどうか疑わしいもの（例えば土器埋納など）を土器棺もどきと呼び、いくつかの事例を提示し比較を試みる。この結果をもとに、小阪合遺跡出土の当遺構について位置付けをするべく、若干の検討をおこなってみたい。

II. 土器埋納とは何か

日本の原始・古代社会では、埋納、特に土器を用いた埋納はどういった背景でおこなわれたのだろうか。また、このような遺構はどのように解釈されているのだろうか。この二つの点について検討する前に、若干の用語と概念の整理をおこなっておく。日本考古学では、埋納はヨーロッパ考古学のデポという概念に類似すると考えられてきた。

まず、埋納という語の定義をここでしておきたい。各種の考古学辞典類をめぐってみた。すると、デポとして記載があったのは以下の一冊のみであった。

デポ でぼ depot 埋納遺構，ないしは遺跡。フランス語のdepotに由来する。一時的な貯蔵のために隠匿されたものや、その施設。ほかの遺構に伴わずに単独で出土する状態で発見される。住居の床面や墓の副葬品として発見されるものは該当しない（大塚・戸沢編 1996）。

佐原眞は、ヨーロッパ考古学における「デポ」の概念を、単数あるいは複数問わず、意識的に遺物を埋め納めること、その遺跡、遺物であり、墓への副葬は除くと定義した。この概念は日本考古学にも、デポ＝埋納という図式で採用可能であり、佐原によれば、「銅鐸・武器形祭器がこれに相当し、そして沖ノ島の祭祀遺跡がこれにあたり、また経塚もその一種としてよい。いまや、日本考古学においても埋納遺跡を遺跡の種類のひとつとして認知すべき」であると考えた（佐原 1985）。佐原の定義によると、土器埋納遺構も広義の埋納行為としてとらえることが可能であるといえよう。しかし、この定義では土器埋納は単独で検出される場合に採用されるべきであるということになる。土器棺と対比すると、土器棺のみ単独で検出される場合、これと類似しているといえよう。しかし、デポの定義からは外れるものの、後生の地鎮・鎮壇の際の土器埋納は、単独で立地するとは限らず建物など他の遺構に付随するものが多い。本章ではこうした背景で土器が埋納されたと考えられる事例と土器棺として扱うには疑問がある事例をひとまとめにして、「土器棺もどき」として取り扱い検討をおこなっていく。

Ⅲ.土器棺もどきの諸例

「土器棺もどき」には、私見によると大別して以下の6つの出土類型が存在しているようだ。ここでは、具体的な資料を提示しながら土器棺もどきについてみていきたい。

(1) 土器が入れ子状で出土する事例（図191）

住居跡から出土する場合と、それ以外に大別される。前者の事例は、愛媛県西条市池の内遺跡第Ⅲ地区1号住居から出土した甕がある。弥生時代中期後葉の甕は住居跡の北西隅で横倒しの状態で検出された。完形の甕にやや小型の甕が納められており、報告者は住居内での土器の収納状況を知る上でも貴重な資料であるとしている（米澤ほか 1989）。また、熊本県球磨郡錦町夏女遺跡2号住居跡では、弥生時代後期の小型の甕が住居跡の北東隅から出土した。この甕内にはミニチュアの壺と甕が計3個組み合わせて納められていた（園村 1993）。一方、住居址以外からの事例としては、愛知県安城市桜林遺跡4-12区西南隅で、完形で出土した古墳時代前期の台付甕があげられる。甕の中には、台付甕の脚台部4個が入れ子のような状態で納められていた（岡安ほか 1998）。福岡県糟屋郡久山町一ノ井出B遺跡第3土壙からは、古墳時代前期の甕が出土した。この甕は横位に置かれ、中に土師器杯3個を重ねて入れてあった。当該期の遺構・遺物は唯一これのみで、付近に集落の存在が考え難いことから、特殊目的の埋納遺構であると報告されている（中間 1995）。

各報告の際、住居跡の事例では、日常に使用していた土器が収納された状態で埋没したと解釈されており、埋納と報告されることは少ない。しかし、単独で土器が入れ子状で出土した場合は、一ノ井出B遺跡のように埋納遺構として報告されるようである。また、桜林遺跡例の方は、調査時に明確な遺構が確認されておらず、台付甕の脚台部という非実用的土器が収められていることに特異さを覚える。この事例も祭祀的土器埋納である可能性は高い。

(2) 装身具・威儀具などが出土する事例（図192、193）

この類で最も古いのは、濱田耕作による神戸市夢野村出土の弥生土器壺・高杯についての報告であろう。この壺は単独で出土し、脚部が欠損した高杯で蓋をされた状態で出土したという。壺内には36個以上の貝輪が納められており、土器の時期は、提示された図から弥生時代中期後葉頃と考えられる。濱田は、貝輪が貴重品として貯蔵されていたと考え、これを一種のデポであるとした（濱田 1920）。

静岡県三島市中手乱遺跡では、弥生時代中期前葉の壺に鹿角製短剣が納められた状態で出土した。壺は流路内に倒れた状態で出土し、土器内面には周辺の覆土と同様の砂礫が充填されていた。短剣は壺の中に切先を下方に向け、基部が土器の頸部内面に接した状態で出土した（岩本 1998）。

土器内に青銅器を伴う事例は比較的多いようだ。福岡県小郡市小郡若山遺跡では、P94内に弥生時代中期後葉の甕が体部に焼成後穿孔をした後伏せた状態で出土し、この中に多紐細文鏡が2面、鏡面を合わせた状態で納められていた（速水 1994）。福岡県朝倉郡夜須町三並ヒエデ遺跡では、弥生時代中期後葉～末の中細銅戈17本が円筒形土器に収められた状態で出土した。この円筒土器は日常の生活用具ではなく、銅戈の鑄造及びその使用に関係した可能性が高いとされる（伊崎 1999）。

大阪府八尾市矢作遺跡SD13の溝底近くより、古墳時代前期の壺が伏せられた状態で出土し、その下には 製鏡1面が置かれていた（米田 1987）。

小郡若山遺跡例や矢作遺跡例はいずれも鏡を置きその上から逆さに土器を被せている点で共通している。このように装身具・威儀具などが出土した場合には、意識的に埋納されたと解釈される場合が多いようである。

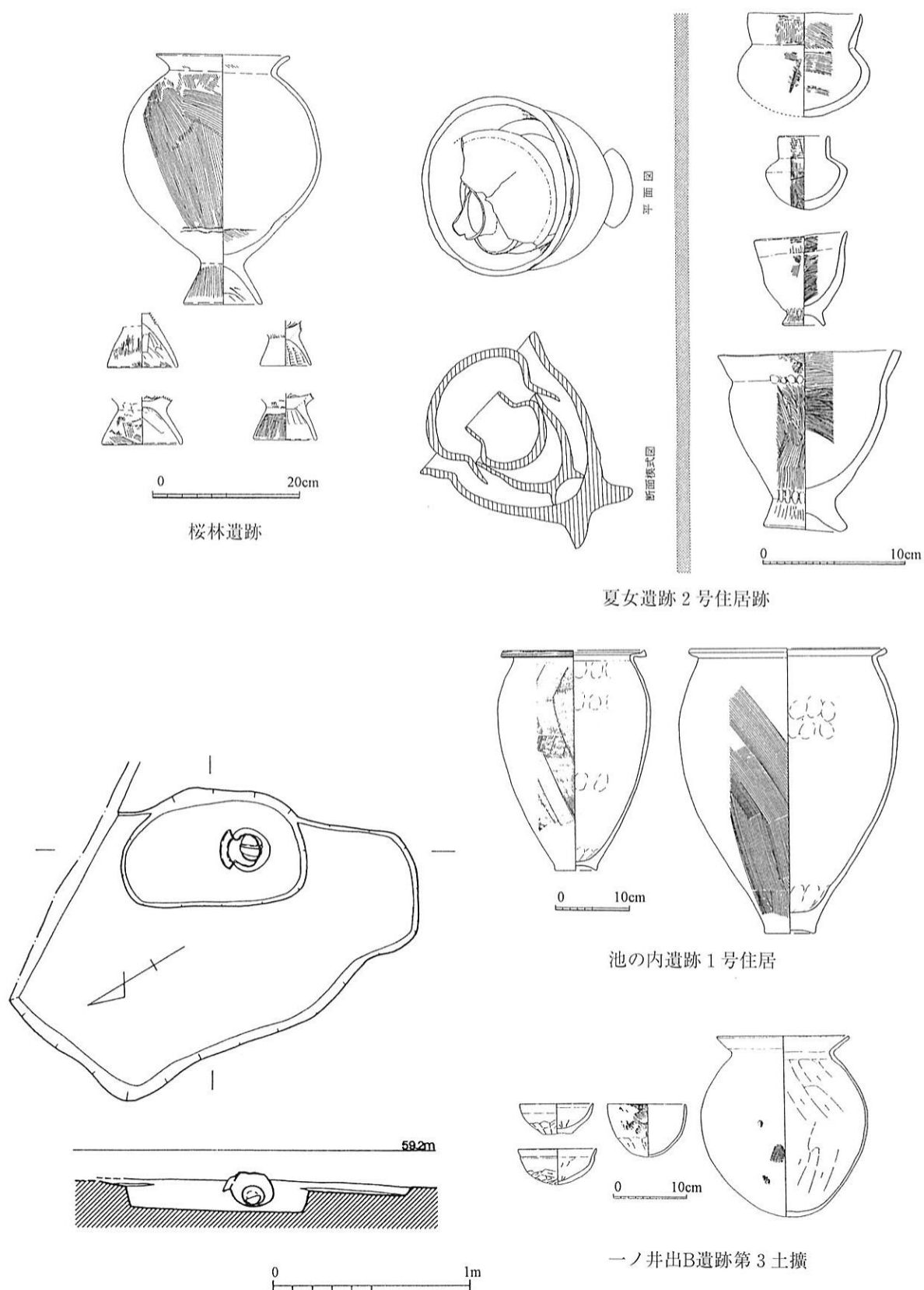


図191 土器棺もどき（入れ子）

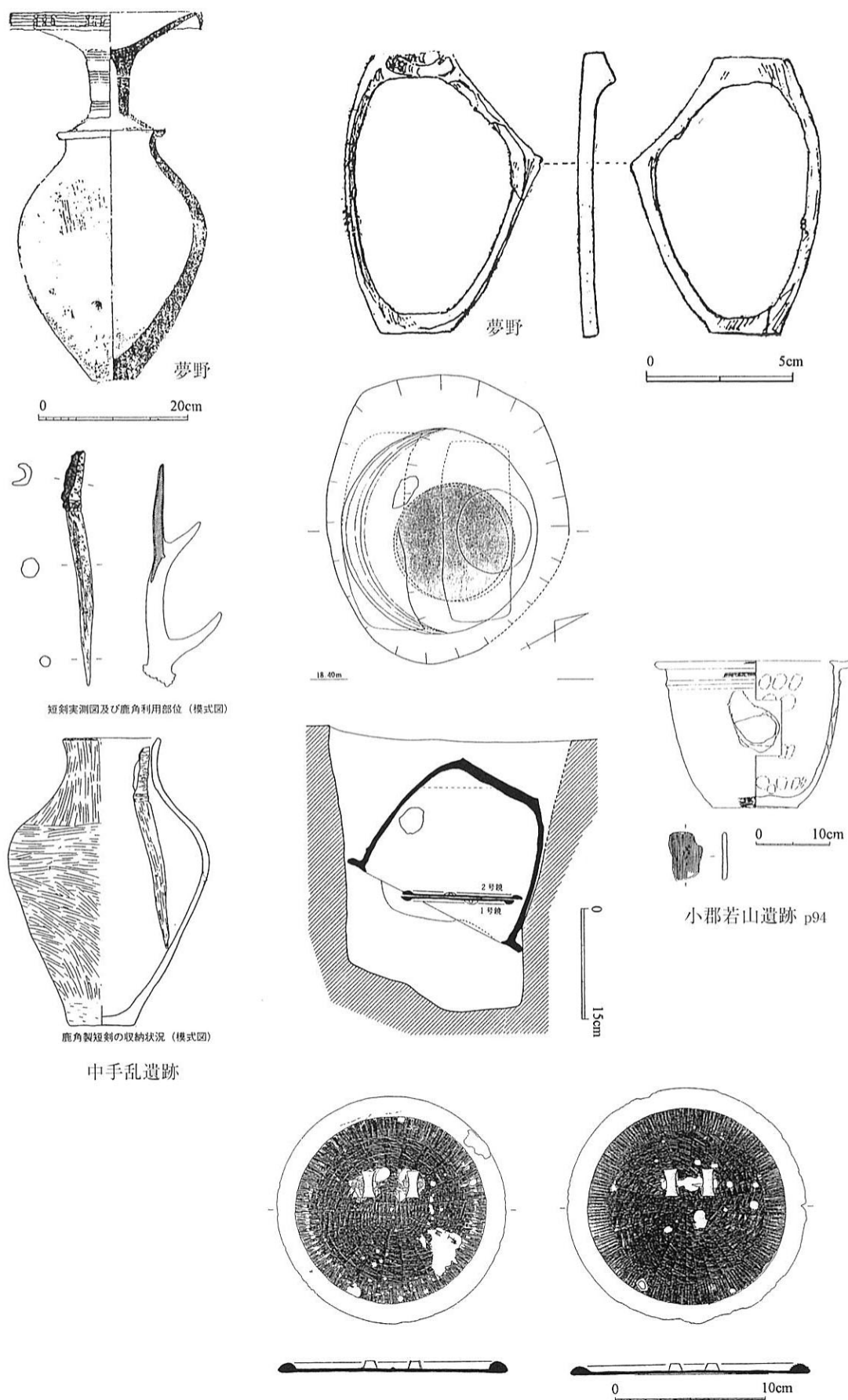


図192 土器棺もどき（装身具・威儀具 1）

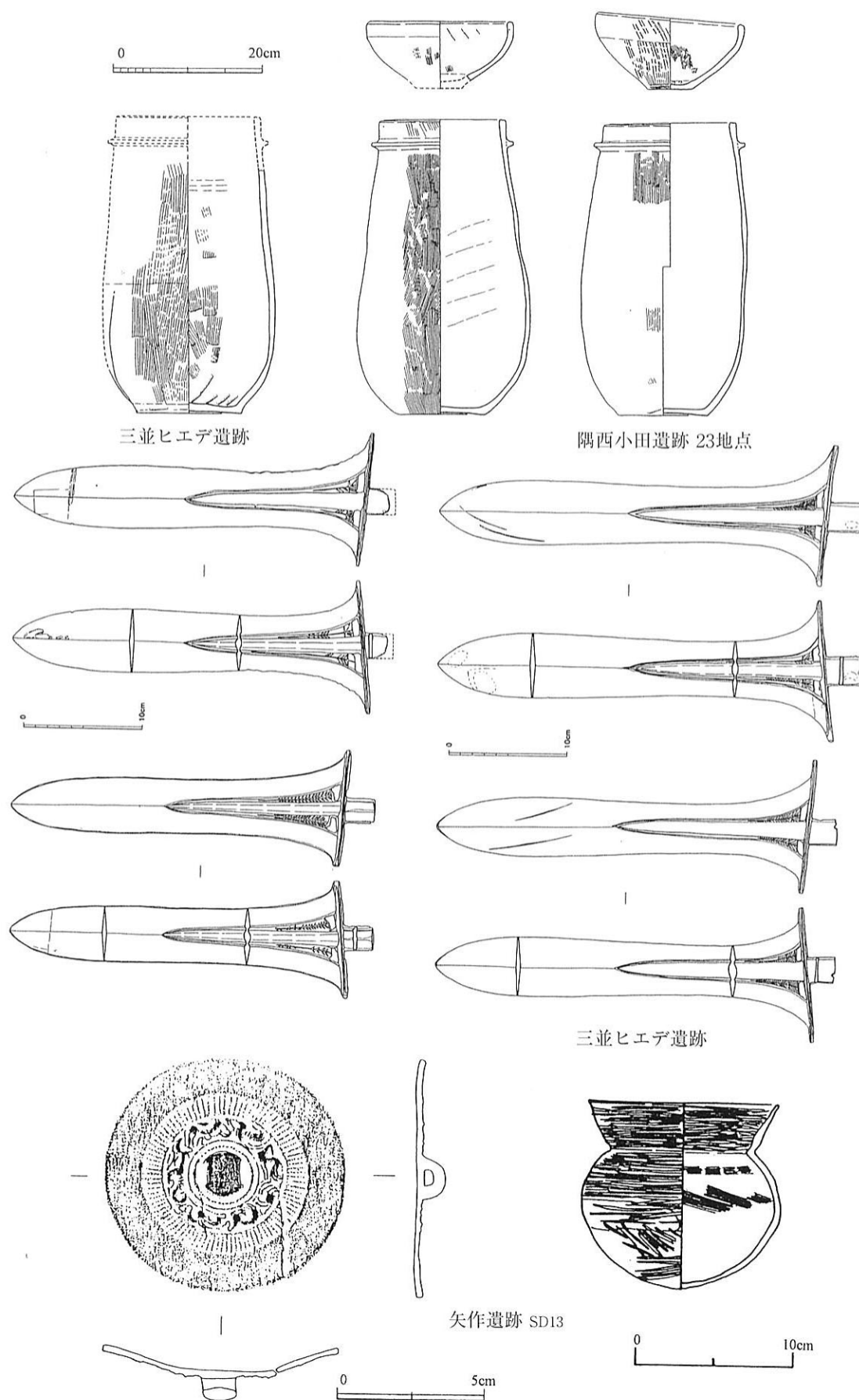


図193 土器棺もどき（装身具・威儀具 2）

(3) 石が出土する事例 (図194, 195)

群馬県高崎市倉賀野万福寺Ⅱ遺跡では、古墳時代前期の16号方形周溝墓周溝西側の北西隅に程近い場所で、完形の壺が横位で出土した。壺の中には2~8cm程度の石が35個入っていた。壺は口縁部をやや下に向けた状態で出土していることから、石が後から混入したとは考えにくく、壺を置いた際に小石を中に入れたとみられる (関口・鷲谷 1994)。岡山県津山市有本遺跡土器棺10は、弥生時代終末~古墳時代初頭の壺を棺身に用いて、別個体の壺・高杯などで蓋をしている。底部から長さ4.2~6.4cmの円礫が四個出土した。出土状況から埋設時に内部に入れられていたもので、後からの流入とは考えられないとされる (小郷 1998)。この事例は、土器棺の埋設状態としてはいささか違和感を覚え、埋葬施設ではない可能性が高い。

大阪府高槻市岡本山東地区遺跡では、古墳時代後期の須恵器甕内部に石が充填されたものが検出された。また、土器内からは須恵器鉢と鉄鎌が出土した。この遺構について調査者は、壺 (甕) の内部に遺体を入れその上に積み石をおこない、更に集石の上に須恵器や鉄器を副葬した土器棺であると推定した (西谷 1966)。これに類似した事例が大阪府和泉市B2地点遺跡でも発見されており、報告では土器棺墓とされている (白石・乾 1992)。また、鳥根県八東郡鹿島町奥才34号墳の中心主体として検出された壺には、内部に径5cm前後の礫が肩部まで詰めこまれていた。その上面には石釧1、捩文鏡1、碧玉製勾玉1、琥珀製勾玉1が置かれていた。礫上面には赤色顔料が塗布されていた。土器は直位に置かれ、蓋に壺下半部を使用する。報告者は、これを土器棺ではなく土器埋納であると考えている (赤沢ほか 1985)。

岡本山東地区遺跡などのように、礫が土器内に充填されている場合には、性格をめぐって土器棺であるという見解と埋納遺構であるという見解の両者が存在していることがわかる。

(4) 食物が出土する事例 (図196)

滋賀県長浜市加田B・C遺跡SX-01から、弥生時代終末~古墳時代初頭にかけての壺が、田も綱の上に横倒しに置かれた状態で遺構基底部から出土した。壺の口縁部は打ち欠かれているらしい。この壺内部からは、モモの種子が出土した。報告者はこれを土器棺であると考えている (宮崎 1986)。モモの種子が出土した例は、大阪府八尾市亀井北遺跡でも知られる。SP8104は庄内式期の二重口縁壺を納め、底部を別の壺底部で塞いでいた。口縁部付近からモモの種1個と土器の外から骨片2点が出土した。土器棺墓としての可能性があるが断定できないとある (小野ほか 1986)。

また、鳥取県東伯郡羽合町長瀬高浜遺跡10E貝殻出土遺構は、古墳時代前期の甕が逆位に置かれた状態で検出された。土器の内部からイガイが1枚と、残りが良くないタガイが数枚重なった状態で出土した。報告者は、この貝は、貝殻を利用する目的で甕の中に納めていたものとの見解を示している (野島・名越ほか 1983)。この事例は、単に貯蔵を目的とした可能性と、貝を祭祀後に埋納した遺構とも理解されよう。

食物が出土する場合にも、土器棺の副葬品と埋納遺構の双方の可能性が指摘されているようだ。

(5) 動物が出土する事例 (図196)

奈良県桜井市大福遺跡では、弥生時代中期の溝Ⅰ中央部から、この溝が埋没した後に埋設されたと考えられる弥生時代後期の壺が口を上にして出土した。この壺内からイヌの骨が一体分出土した。イヌの遺体を納めるには壺の容量が小さいことから、この骨は、死後一旦埋められた後、掘り出され主な骨だけを集めて壺の中に納め、再度埋められたものであろうとされる。他に壺内からはイノシシの基節骨が1点出土している (亀田編 1978)。このように動物が出土する事例と、前述の食物が出土する事例の区別

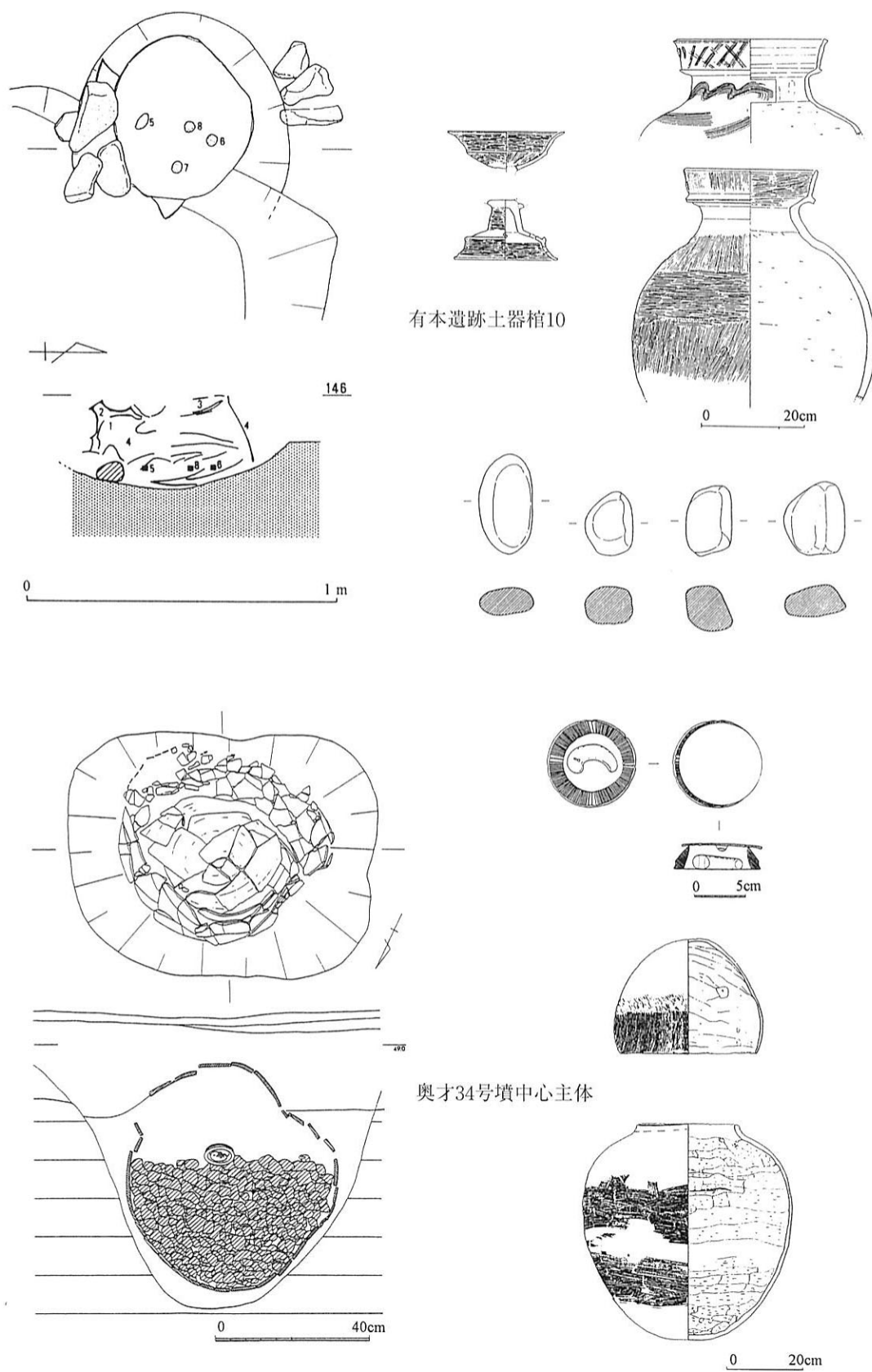


図194 土器棺もどき（石1）

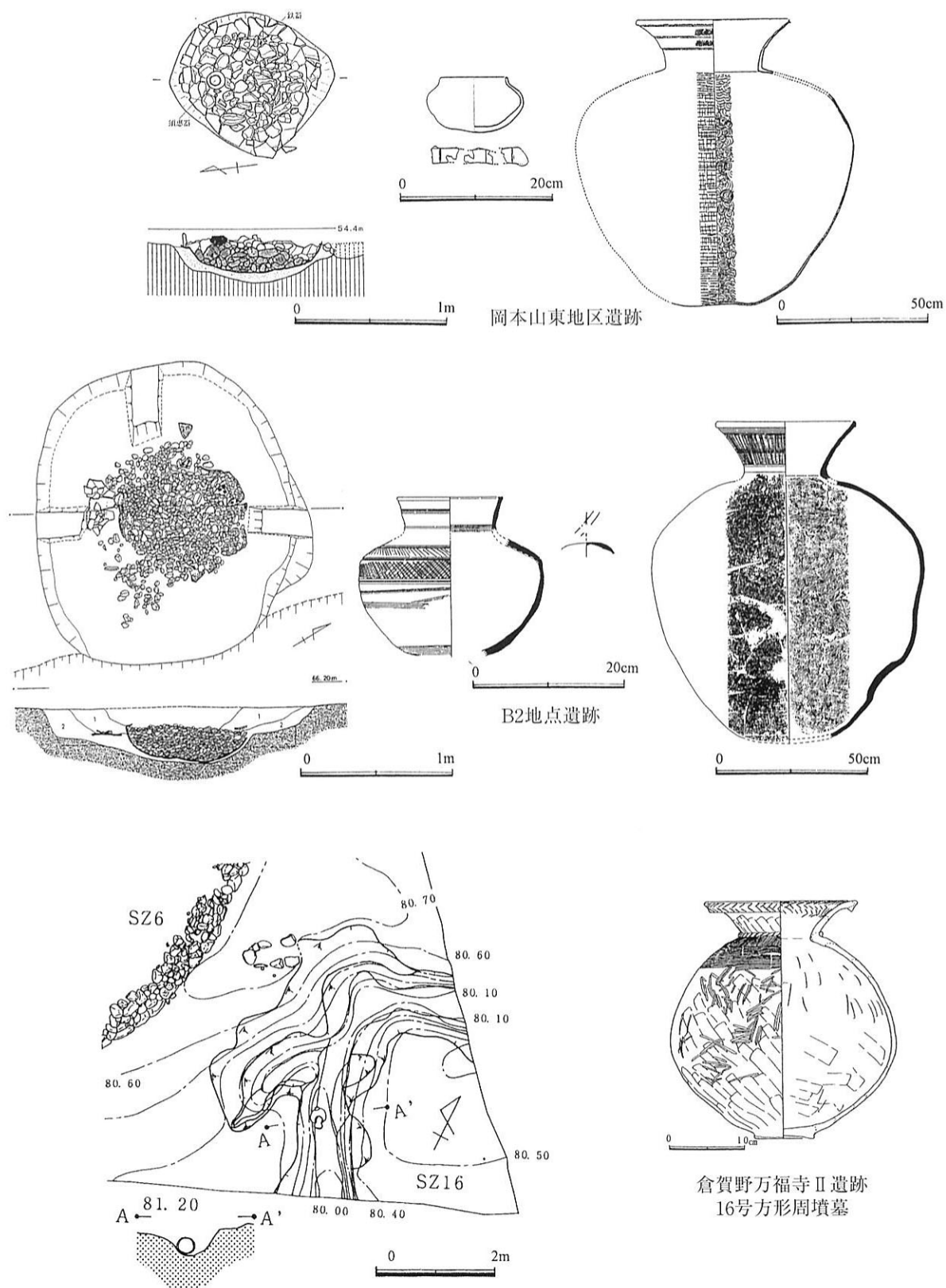


図195 土器棺もどき (石2)

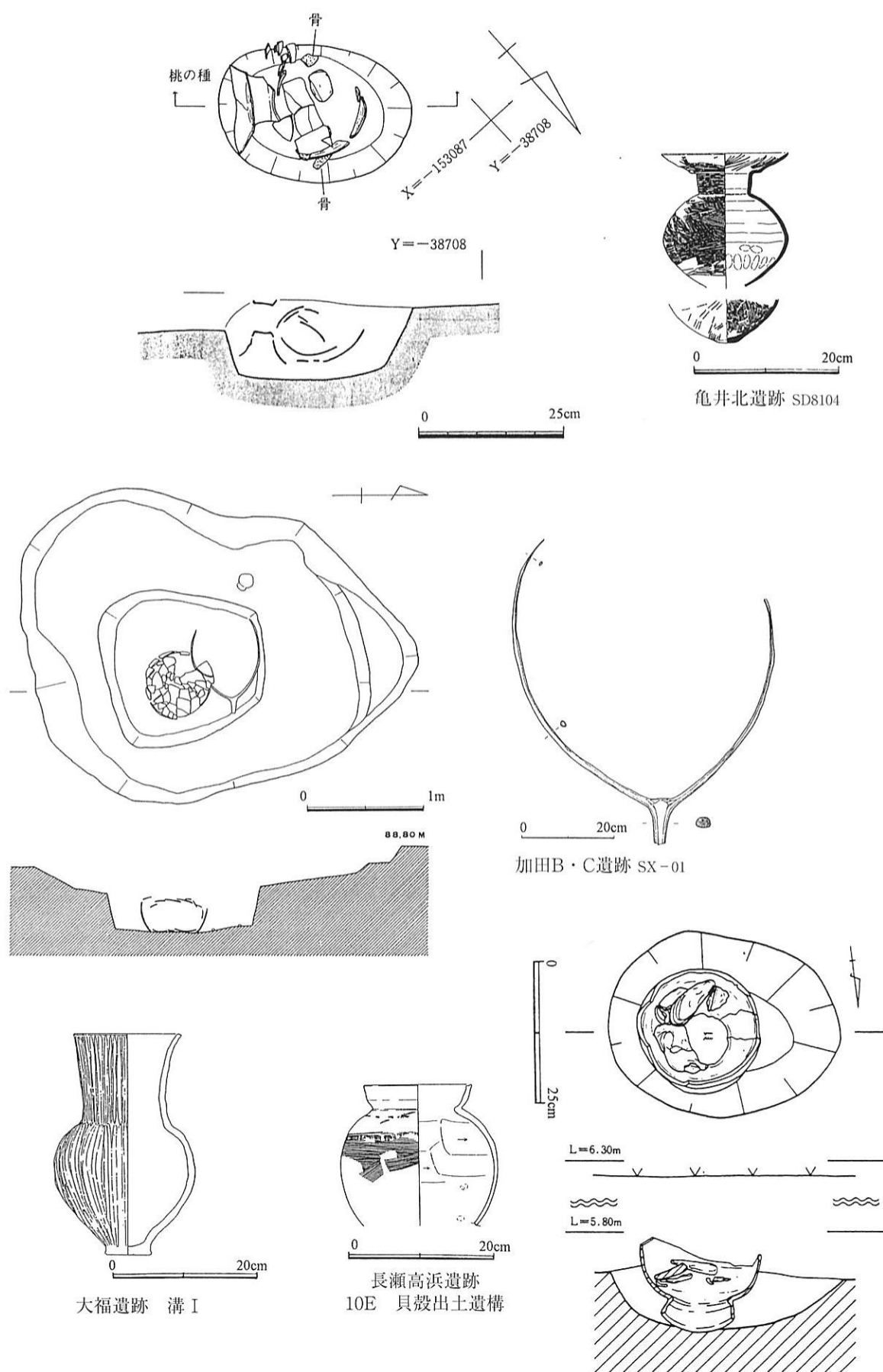


図196 土器棺もどき（食物・動物）

を付けることは、困難が伴うであろう。例えば台湾花蓮市所在の、新石器時代と考えられる花崗山遺跡B4甕棺内からは、7・8歳と考えられる人骨と共に、魚骨が出土している（葉 1996）。このように人骨に伴って動物遺体が出土する場合は、食用のもので遺体に副葬したであろうことが想定できる。しかし、大福遺跡例では人骨は壺内からは出土しておらず、動物のみが収骨されたことがわかる。そこで本例は、食用以外の可能性が想定されるため（4）とは区別して扱った。

（6）何も出土しない事例（図197）

土器内から何も出土しない例のうち、特に蓋・身の問題に留意して事例をみていきたい。鳥取県東伯郡三朝町丸山遺跡SX-10は、古墳時代中期の長頸壺を直位に据え、その上から甕を被せる。報告者はこの遺構について、祭祀的性格が強いとしている（伊達編 1984）。また、鳥取県倉吉市不入岡遺跡3号墳の周溝内で検出された4号埋葬施設は、古墳時代中期の土師器高杯を逆さに置き、土師器甕を被せている。報告者はこれを合わせ口の「土器棺墓」としている（竹宮ほか 1995）。土器棺の蓋とするには高杯の合わせ方が不自然ではないだろうか。このような不自然な蓋の類例は近畿地方にも存在している。滋賀県近江八幡市蛇塚遺跡SK-04は、古墳時代前期の壺が倒立した状態で出土した。蓋には小型丸底壺を使用している。報告者は、合わせ口の「壺棺」としているが、壺が倒立している点から疑問も残ると考えている（宮崎 1985）。

以上のように、倒立した状態で、且つ下にある土器が上の土器よりも小さい場合には、遺体を埋葬した棺とするには容量的に疑問視されることが多く、土器棺ではなく埋納遺構・祭祀関係遺構的な扱いを受けているようだ。

IV-1. 土器棺もどきから土器埋納・土器棺葬を考える

前章で例示した「土器棺もどき」には土器棺、土器埋納、それ以外の三つが含まれていると考えられる。そこで、土器棺・土器埋納のいずれとも考えられない事例を抽出してみたい。そこで、先の土器埋納の定義を想起すると、埋納は埋納遺構単独で立地することが多いとされる。また、土器棺は単独で出土する場合もあるが、墓域から見つかることが多い。これらの点を勘案すると、居住域出土の「土器棺もどき」が除外の対象になると考えられる。池の内遺跡例・夏女遺跡例はいずれも住居跡から入れ子状態で土器が出土しており、これらは住居内における土器収納の所産であると考えられる。しかし、入れ子状に土器が置かれた土坑が単独で立地している一ノ井出B遺跡例のようなものもあり、入れ子がすべて収納の結果とは考えられない。これを土器埋納とするか土器棺の副葬品とするかは、今後、入れ子状土器の資料を更に検索し、改めて検討する必要がある。

これと関係して、秋山浩三は池上曾根遺跡で検出された土器埋設遺構について検討をし、埋設された土器は底を意図的に抜いた状態で出土しており、これらが井戸枠として利用されていたことを明らかにした。また池上曾根遺跡で、以前土器棺とされた遺構も底は存在せず、土器井戸の可能性が高いことを指摘した（秋山 1999）。この場合は土器の底部が抜けているという決定的な相違があるために、土器埋納・土器棺との区別は容易であろう。

つぎに、具体的に土器埋納と土器棺を比較してみたい。まず土器のサイズについてはどうだろう。土器棺には大小様々あるが、土器埋納使用土器は、土器棺と比較して全体的に小さい傾向が看取される。使用された器種については、土器埋納と考えられるものは壺が多いことが指摘できよう。土器の埋置状態は、土器棺は直位・斜位・横位・逆位があるが、土器埋納とされるものは逆位や直位が目立っている。

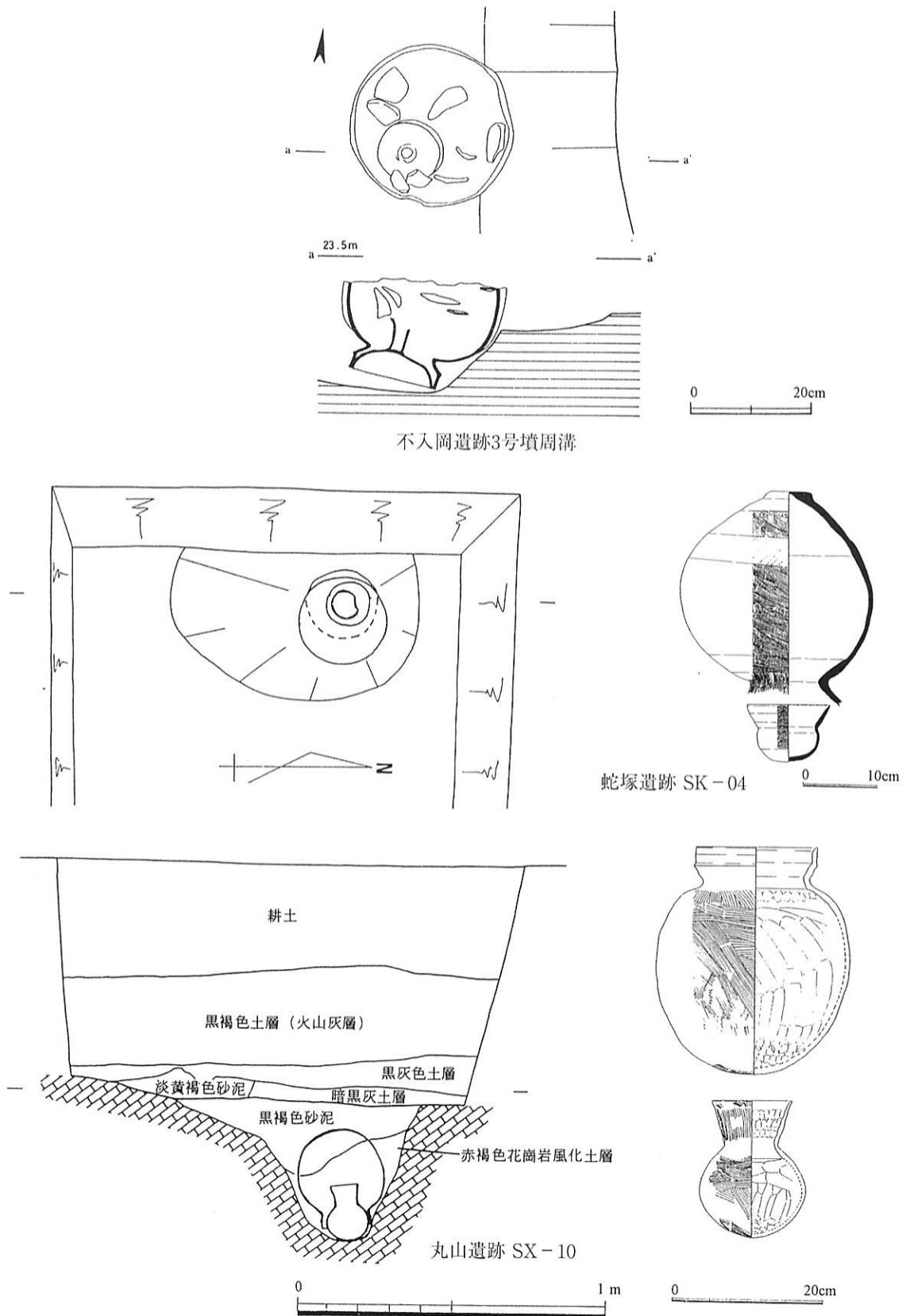


図197 土器棺もどき (何も出土しない)

時期についてみると、弥生時代前期はないが中期後半以降土器埋納は増加し、古墳時代を通じて存在しているようだ。立地は先の定義では、単独で立地すれば土器埋納ということになるが、「土器棺もどき」には溝、河道といったところから出土しているものも多く土器棺が単独で埋設される場合も多いため、判断基準にはなりにくい。

掘り方の状態については、土器棺の掘り方は土器に沿うようにしてきっちりと掘られ小さい。これに対して土器埋納遺構の場合は掘り方は土器よりもかなり大きいようだ。

土器の内容物と副葬品を有する土器棺との比較をおこなってみたい。土器棺内から出土する副葬品と、土器埋納の内容物との区別はきっちり付けられるのだろうか。

岡本山東地区遺跡例やB2地点遺跡例、そして奥才34号墳例のように土器内に礫が充填されたものは墓とすべきなのか、はたまた埋納遺構とすべきなのか。奥才34号墳例については、土器埋納遺構とする説（赤沢ほか 1985, 松本 1986, 東森 1994）と土器棺とする説（清水 1998）があり、筆者もこの事例については見解を保留した（角南 1999）。その後、古墳時代後期にも岡本山東地区遺跡例やB2地点遺跡例といったよく類似したものが存在していることを知った。また、兵庫県三木市和田神社遺跡では、弥生時代終末～古墳時代前期の土器棺が群を構成して検出されており、この中のSX-07は底部に礫が充填されていた（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 1996）。結論から先に述べてしまうと、奥才34号墳例は墓と考えるべきではなかろうか。奥才34号墳例は土器を古墳群の中のマウンドのほぼ中心に埋設されており、土器埋納の定義からすると墓に所在する例となり、土器内から出土したものは副葬品と考える方がよい。弥生時代終末～古墳時代には遺体が極めて小さい場合や、二次葬の遺体を埋葬する場合に、土器内に礫を充填しその上に遺体を埋設する、もしくは逆に遺体を置きその上から礫を充填するという葬法が存在した可能性がある。

和歌山県和歌山市太田・黒田遺跡の土器棺内から、砥石が一個出土している（栗本 1996）。これは副葬品というよりは、砥石が抱かせ石として転用された可能性が高い。しかし、この土器棺は壺のみ使用した単棺であり、棺蓋は存在しない。土器棺ではない可能性も考えておく必要があろう。

威儀具が伴う場合の土器棺は、先の奥才34号墳例以外には鳥取県鳥取市美和37号墳第2主体から古墳時代前期の珠文鏡が出土した例がある（山田 1994）。この事例の場合は棺蓋と身に壺を使用している。装身具を伴う場合の土器棺は、愛媛県松山市祝谷六丁目遺跡の壺棺例がある。この棺に使用された土器は弥生時代中期後葉のもので、棺内から貝輪が2個出土した。また棺内には小児骨が遺存していたことから、これが埋納ではなく土器棺の副葬品であることを決定付けている。当例も棺蓋と身に壺を使用している（梅本編 1994）。植物遺体を伴う事例は、兵庫県神戸市玉津田中遺跡の2例があげられる。SP46001とSP46002はいずれも弥生時代中期後葉の甕を棺身として使用し、SP46001は甕と鉢で蓋を、SP46002は甕で蓋をしている（深井ほか 1996）。動物が伴う事例のうち、イヌの骨が出土した大福遺跡例は、縄文時代にみられる土坑にそのままイヌを埋葬した墓というよりも、二次葬の可能性が高く蓋は確認されていない。また壺内からはイノシシの基節骨が出土しており、二次的にイヌやイノシシが土器埋納されたと理解する方がよく、墓よりも土器埋納と考えるべきだ。

このように、土器内から出土したものが土器棺へ埋葬された人の副葬品と考えられる事例では、きっちりとした蓋を有する場合が多い傾向が認められる。しかし、土器埋納の場合は、土器棺のようにきっちりと蓋をするものは少ないようである。密閉を意図して蓋をきっちりとするか否かが、両者を区別する最大のメルクマールになる可能性は大きい。土器埋納と考えられる事例でも蓋をするものがあるが、

これは前述したように下の土器よりも上の土器が大きく、土器棺が一般的に斜位や横位をとるのに対して、ほとんどが直位に設置されている点が特徴的であろう。しかし、この類として例示した不入岡遺跡例は古墳の周溝内に埋置されており、逆位に埋置された土器棺の可能性が残される。

ではこうした、土器埋納遺構の内容物は何であったか。有機物であった可能性が最も高いだろうが、むしろ当初から何も収納していなかったものもあるのではないか。つまり、「気」のようなものを封じ込める意図としての土器埋納もこの頃には存在したのではないか。

しかし、青銅器を中心とした威儀具の土器埋納には蓋を伴う場合がある。三並ヒエデ遺跡・福岡県筑紫野市隈西小田遺跡7地点では、特殊な円筒形土器の中に、鉢で蓋をし銅戈を納めていた。この円筒土器が埋納のための専用のものかどうか性格は不明である。また、青銅器埋納に逆位の土器が伴う場合もある。銅鐸埋納という行為について、酒井龍一は銅鐸の内的意味を重視する立場から、銅鐸の文様帯は、外部と結界された内なる概念が封じ込められたとの解釈をおこなっている（酒井 1978）。このように威儀具としての青銅器の内的意味を重視するならば、土器で蓋をする、覆うことによって、青銅器を封じ込める意味があったのではなかろうか。このため、わざわざ土器を被せた埋納がおこなわれたのではないか。いずれにせよ、青銅器の土器埋納は他の土器埋納とは様相を異にしている。

IV-2. 小阪合遺跡住居865出土埋設土器の検討（図198）

これまで検討してきた結果をもとに、小阪合遺跡住居865出土埋設土器について報告に基づきながら再び注目してみよう。この資料は完形の壺をほぼ水平に寝かせ、別個体の破片でその口縁部を覆った状態で出土した。この壺には体部下半に焼成後穿孔がある。問題とする土器は、住居865の南西柱穴とおぼしきピット926の真上にあり、住居865出土土器とこの土器はともに弥生時代終末～古墳時代初頭に帰属することから、埋設土器は住居廃絶後それほど時間を経ないうちに窪みに据えられた土器棺の可能性が高いとされる。土器内からは何も検出されていない。

先に注目したように蓋の有無という点では、小阪合遺跡例はきっちりとした蓋がされており、土器棺的である。また、埋葬状態は横位でありこちらも土器棺の様相に酷似している。これらの点から小阪合遺跡の埋設土器は、土器埋納ではなく土器棺である可能性が高いといえよう。つまり、調査担当者の見解のとおり、住居865が廃棄されて間もなく土器棺が埋設されたことが支持できる。

V. 小結

以上、土器が単体で出土した事例を「土器棺もどき」として紹介し、これらを土器棺と土器埋納、その他に区別する基準を模索してみた。ここで注目した区分の基準は蓋の有無と埋葬状態で、この点からは小阪合遺跡例は土器埋納ではなく土器棺の可能性が高いことを示した。しかし、現状では土器埋納の定義が曖昧であり、研究も「祭祀行為」という認識がされる程度で、正面からこのテーマに取り組んだものは律令期以前の原始・古代ではほとんど皆無であるようだ。これからの更なる研究が期待される。

派生する意味・問題として、土器棺でも土器埋納でもないと思われるものの性格が注目される。特に住居跡内から入れ子状態で土器が出土する事例は、今後、家屋内の土器収納や空間配置の問題へアプローチすることが可能ではないだろうか。

謝辞 本稿を執筆する機会を頂いた、小阪合遺跡調査担当者の駒井正明・本間元樹両氏に先ず深く感謝したい。また、次の方々にも資料収集などで御教示・御協力頂いた。記して感謝したい。

岸本一宏、忽那敬三、狭川真一、佐藤亜聖、関口 修、林 麻穂、藤澤典彦

【引用・参考文献】

- 赤沢秀則ほか『奥才古墳群』1985 鹿島町教育委員会
- 秋山浩三「池上曾根遺跡の弥生時代井戸諸態」『みずほ 30』1999 大和弥生文化の会
- 伊崎俊秋「福岡県夜須町出土の銅戈」『甘木歴史資料館報1』1999 甘木歴史資料館
- 葉 美珍「花崗山遺址甕棺の研究」『台湾考古百年記念検討会会議論文及工作報告』1996 中央研究院歴史言語研究所
- 岩本 貴「鹿角製短剣について」『御殿川流域遺跡群 IV』1998 (財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 梅木謙一編『道後北遺跡群 II』1994 松山市教育委員会・(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
- 大塚初重・戸沢充則編『最新日本考古学用語辞典』1996 柏書房
- 岡安雅彦ほか『桜林遺跡』1998 安城市教育委員会
- 小郷利幸『有本遺跡・男戸嶋古墳・上遠戸嶋遺跡』1998 津山市土地開発公社・津山市教育委員会
- 小野久隆ほか『亀井北(その1)』1986 大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
- 栗本美香「太田・黒田遺跡第24次調査」『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報 3』1996 (財)和歌山市文化体育振興事業団
- 酒井龍一「銅鐸・その内なる世界」『摂河泉文化資料 10』1978 北村文庫会
- 佐原 真「ヨーロッパ先史考古学における埋納の概念」『国立歴史民俗博物館研究報告 7』1985 国立歴史民俗博物館
- 清水真一「西日本の土器棺」『弥生人のタイムカプセル』1998 福岡市立博物館
- 白石耕治・乾 哲也『和泉丘陵の古墳』1992 和泉丘陵内遺跡調査会
- 角南聡一郎「土器棺の副葬品」『文化財学報 17』1999 奈良大学文化財学科
- 関口 修・鷺谷亨信『倉賀野万福寺Ⅱ遺跡発掘調査報告書』1994 高崎市遺跡調査会・高崎市教育委員会
- 園村辰実『夏女遺跡』1993 熊本県教育委員会
- 竹宮重也子ほか『不入岡遺跡群発掘調査報告書』1995 倉吉市教育委員会
- 伊達宗泰編『丸山遺跡発掘調査報告書』1984 三朝町教育委員会
- 中間研志『比原遺跡群 III』1995 久山町教育委員会
- 西谷 正『紅茸山及岡本山東地区遺跡の調査』1966 高槻市教育委員会
- 野島珠美・名越智津子ほか『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書 VI』1983 (財)鳥取県教育文化財団
- 濱田耕作「貝輪を容れた素焼壺」『人類学雑誌 36-8』1920 日本人類学会
- 速水信也『小郡若山遺跡 3』1994 小郡市教育委員会
- 東森市良「出雲地方における古墳時代前期墓制について」『山陰地域における日朝交流の史的展開』1994 島根史学会
- 『和田神社遺跡説明会資料』1996 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 深井明比呂ほか『玉津田中遺跡 5』1996 兵庫県教育委員会
- 松本岩雄「墳丘出土の大形土器」『山陰考古学の諸問題』1986
- 宮崎幹也『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 XII-2』1985 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 宮崎幹也「Ⅲ.長浜市加田B・C、阿弥陀寺遺跡」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 XⅢ-4』1986
- 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 渡部徹也「鹿児島県指宿市向吉遺跡出土の祭祀遺構について」『人類史研究 9』1997 人類史研究会

山田真宏『平成4・5年度美和古墳群発掘調査報告書』1994 (財)鳥取市教育福祉振興会

米澤俊二編『一般国道11号西条市バイパス埋蔵文化財調査報告書』1989 (財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

米田敏幸「矢作遺跡発掘調査概要」『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書Ⅱ』1987 八尾市教育委員会

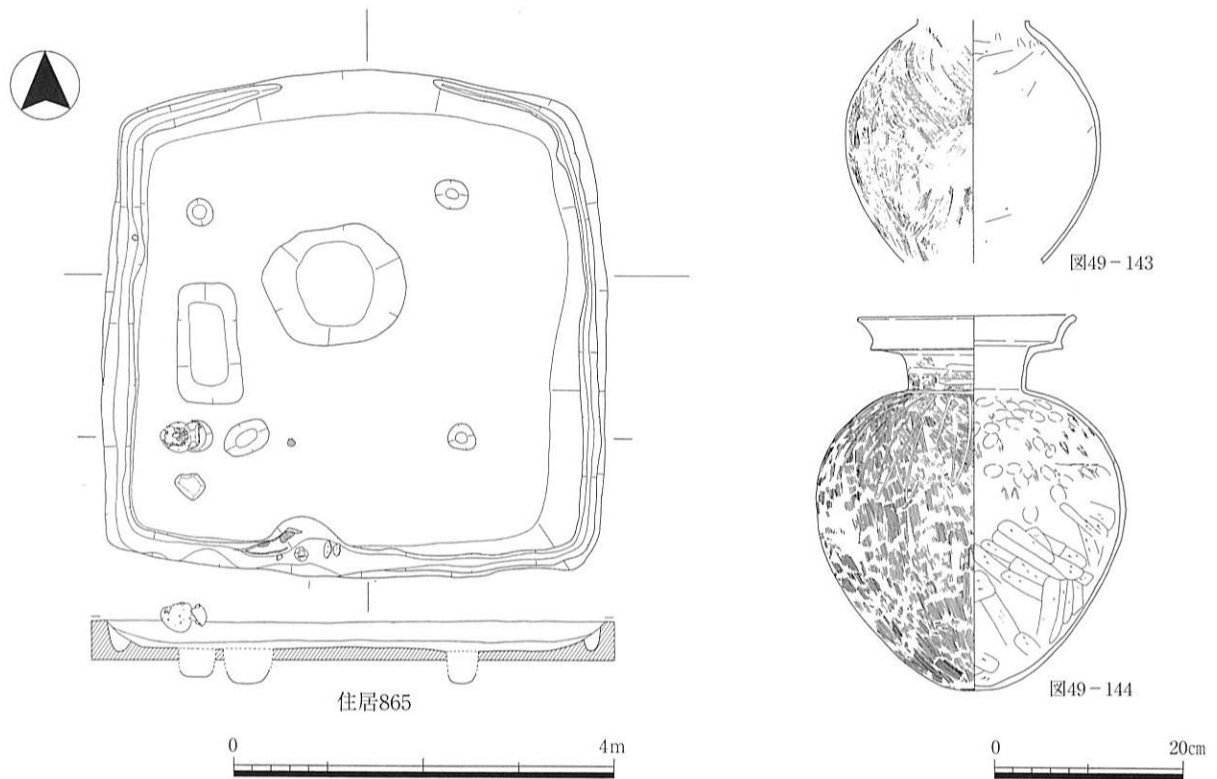


図198 小阪合遺跡の土器棺